

【旧約聖書日課】 イザヤ書 55章1～11節

- 1 渇きを覚えている者は皆、水のところに来るがよい。
銀を持たない者も来るがよい。
穀物を求めて、食べよ。
来て、銀を払うことなく穀物を求め
価を払うことなく、ぶどう酒と乳を得よ。
- 2 なぜ、糧にならぬもののために銀を量って払い
飢えを満たさぬもののために労するのか。
わたしに聞き従えば
良いものを食べることができる。
あなたたちの魂はその豊かさを楽しむであろう。
- 3 耳を傾けて聞き、わたしのもとに来るがよい。
聞き従って、魂に命を得よ。
わたしはあなたたちとどこしえの契約を結ぶ。
グビデに約束した真実の慈しみのゆえに。
- 4 見よ
かつてわたしは彼を立てて諸国民への証人とし
諸国民の指導者、統治者とした。
- 5 今、あなたは知らなかった国に呼びかける。
あなたを知らなかった国は
あなたのもとに馳せ参じるであろう。
あなたの神である主
あなたに輝きを与えられる。
イスラエルの聖なる神のゆえに。
- 6 主を尋ね求めよ、見いだしうるときに。
呼び求めよ、近くにいますうちに。
- 7 神に逆らう者はその道を離れ
悪を行う者はそのたくらみを捨てよ。
主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。
わたしたちの神に立ち帰るならば
豊かに赦してください。
- 8 わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり
わたしの道はあなたたちの道と異なると
主は言われる。
- 9 天が地を高く超えているように
わたしの道は、あなたたちの道を
わたしの思いは
あなたたちの思いを、高く超えている。
- 10 雨も雪も、ひとたび天から降れば
むなしく天に戻ることはない。
それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ
種蒔く人には種を与え
食べる人には糧を与える。

11 そのように、わたしの口から出るわたしの言葉も
むなしくは、わたしのもとに戻らない。
それはわたしの望むことを成し遂げ
わたしが与えた使命を必ず果たす。

【福音書日課】ルカによる福音書 4章14～21節

14 イエスは“霊”の力に満ちてガリラヤに帰られた。その評判が周りの地方一帯に広まった。
15 イエスは諸会堂で教え、皆から尊敬を受けられた。

16 イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を
朗読しようとしてお立ちになった。17 預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次
のように書いてある個所が目にとまった。

18 「主の霊がわたしの上におられる。
貧しい人に福音を告げ知らせるために、
主がわたしに油を注がれたからである。
主がわたしを遣わされたのは、
捕らわれている人に解放を、
目の見えない人に視力の回復を告げ、
圧迫されている人を自由にし、

19 主の恵みの年を告げるためである。」

20 イエスは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた。会堂にいるすべての人の目がイエス
に注がれていた。21 そこでイエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にし
たとき、実現した」と話し始められた。

命の訪れを待つ【こども説教のために】

「降誕祭（クリスマス）」の祝いまで三週間となる12月4日に、つぼみの付いた小枝を手折ってきて、水差しに挿しておくという習慣を守っている人たちがいます。冬の寒さを超えて春に綻ぶはずのつぼみは、室内の暖気に誘われて、ちょうど降誕祭を迎えるころに花を咲かせます。この小枝は「バルバラの枝」と呼ばれてきました。キリスト信者や教会に対する迫害が激しかった3世紀、ローマ帝国の東の都ニコメディアの裕福な家に生まれた少女バルバラが、キリスト信仰に入ったがゆえに父親によって拷問を受けたとき、逃亡先で手折って牢獄に持ってきていた小枝から花が咲いたという伝承によって、そう呼ばれてきたのです。12月4日は、そのバルバラが剣によって殺されたことを記念する日とされてきました。

新しい命の誕生を、わたしたちは、待ちわびます。だからこそ、神の御子としてお生まれになられた主イエスが幼子として誕生されたことを、待つことから始めて、祝うのです。小枝に付くつぼみは、寒空のもとにあっても、いずれ花を咲かせることでしょう。それでも、待降節の歩みの中、その一枝を手折って、わたしたちの部屋に迎えるならば、つぼみが綻んで咲く花は、わたしたちの心を豊かにしてくれるに違いありません。

「糧」になるもの

待降節の四週間、わたしたちは、ひたすら降誕祭を迎えるための備えに心を用います。古い時代、ある地域の人たちは、この備えの期間を九週間設けて過ごしたといわれます。一方で、この備えの期間を特に設けることなく、降誕祭の祝いを迎える習慣を守ってきた人たちもいます。四週間の待降節は、わたしたちの連なる教会の伝統を受け継いできた先達が、多くの経験を重ねた先に一つの知恵として定めてきたものにすぎません。

春の復活祭に備える四十日間の受難節と同様、待降節の四週間は、何かと忙しい現代人には、少し長すぎる期間のようにも思えます。この期間の日曜日ごとの礼拝に連なることだけで、ようやく降誕祭に備える期節であることを心に留めている、という方も少なくないでしょう。

一方で、わたしたちは、この季節を、多くの「クリスマス」に囲まれながら過ごしてもいます。商店だけでなく多くの家庭も、この季節、「クリスマス」で飾られています。もちろん、教会もこの季節にふさわしい装いを整えますが、教会の外で、またキリスト信者ではない家庭で、教会以上に「クリスマス」らしい装いが施されていることに気づかされ、驚かされもします。

10月、11月にかけてドイツから来日され、5週にわたってわたしたちの教会の礼拝に出席くださったご夫妻から、「シュトーレン」をいただきました。きっと、教会の皆さんにお届けしたかったに違いありませんが、これは牧師の役得とさせていただきます。「シュトーレン」は、ドイツでは、待降節の間に少しずつ食べるものです。日本でも、この季節の菓子として、多くの菓子店が販売していますから、多くの方が召し上がられていることでしょう。確かに、季節限定の菓子を少しいただくこと自体、人の心を豊かにするものです。「シュトーレン」を通して、ドイツの人々の降誕祭に向けた特別な思いに接することになる方もあるでしょう。とは言っても、「シュトーレン」を食べながら降誕祭に備える待降節の祈りに思いを向けている人は、ほとんどいないかもしれません。

「クリスマス」らしいことが何でも世の中で手に入る時代に、わたしたちが教会で降誕祭を祝うとき、いったい何をしたらよいだろうかと思わされます。若い人たちに、子どもたちに、降誕祭の祝いを、ほかでもない教会で共に過ごそうと、何をもち呼びかけることができるでしょうか。

わたしどもが子どものころ、教会学校のクリスマスの祝いでは、創作劇が盛んに演じられていました。最近、聖書朗読と讃美を中心とした「降誕劇礼拝」を共に作っていくことが大切にされています。わたしたちが、降誕祭の祝いとして子どもたちに受け渡していくことができるものは、結局のところ、これしかないからです。聖書の告げるところと、讃美の歌です。

「この言葉は、今日、実現した」

降誕祭の物語は、主イエスが「ダビデの町」と呼ばれるベツレヘムでお生まれになられたと伝えていますが、実際に育たれたのはガリラヤの村ナザレです。この村で、両親と兄弟たちと、そして村の人々と共に、成人するまで過ごされたのです。そこから出て、信仰の旅を始められたのは、おそらく三十歳近くになってからのことのようにです。

宣教活動を始められてから、主イエスがどれほどの頻度で故郷ナザレにお帰りになられたのかは、わかりません。活動拠点は、ガリラヤ湖の北岸にあるカファルナウムという大きな町に置いていたようですが、故郷に帰られることもあったのでしょう。

故郷ナザレに帰られれば、主イエスは、家族や昔なじみの人々と共に、村の会堂に足を運び、安息日には共に礼拝にあずかられたはずで、この会堂で、主イエスも少年時代から聖書の朗読を学び、ユダヤ人としての教育をお受けになられていました。村を出ていった者であっても、帰郷すれば、皆に歓迎されたことでしょう。当番でなくても、聖書朗読が任せられ、勧めを語ることが期待されもしたのです。もちろん、彼ら村の人々が期待していたのは、久しぶりに帰ってきた仲間が、かつてと同じように、自分たちの受け継いできた仕方で聖書を朗読し、勧めを語ってくれることであつたはずで、

ところが、主イエスは、どうも、その期待どおりにはなさらなかつたようです。渡された巻物を開いて、「イザヤ書」の朗読をされると、主イエスは、礼拝に集まってきている人々に向かって、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められた、というのです。

それが、そこにいた者たちをどれほど驚かせるものであつたのか、わたしたちは、この後に物語られているところから推測するしかありません。ただ、それが一部の人たちをひどく怒らせるものであつたのは、確かなようです。主イエスは、この後、村はずれまで追い詰められ、そこを去って行くことになられたのです。

「聖書の言葉は、実現した」。いったい、それが何を意味するのか。わたしたちには、どこか謎めいて聞こえます。それは、予言が成就した、という意味でしょうか。魔術の言葉か呪文のように、その言葉が超自然的な力を発揮して働いた、という意味でしょうか。

いいえ、主イエスは、ただ、「聖書の言葉」の語る世界に、ご自身の人生を置くことを選ばれたのです。「聖書」が物語る神の世界に、ご自身の人生の物語を見出されたのです。これを聞いた弟子たちは、主イエスの教えを伝えるだけでなく、その生涯を物語ったのです。降誕の物語から、死の物語に至るまで。それは、「聖書」が物語る神の世界に生きた人の物語なのです。